

## 日本史分野における「主体的、対話的で深い学びの実践」、今後の展望について

### 1 はじめに…これまで（前期研究授業含め）の反省から

前期のミニ研究授業後「生徒からの意見をもう少しださせたい方がよい（いかに頭の中をアクティブにさせるかがポイント）」、「解答を生徒に解説させる場合があってもよい」と貴重な意見を頂戴することができた。というのも「主体的、対話的で深い学び」を実践する上で現状から質を上げていくにはここを改善する必要がありました。これまでは発表資料を班でまとめて発表させて、それを解説するスタイルを採用していたが、「解説を重視し過ぎるあまり解説が長くなり、生徒が解説する余地が少ない」というのが改善すべき点としてあげられる。

そこで、『アクティブラーニングのデザイン 東京大学の新しい教養教育』（永田敬、林一雅 2016）によると「ボンウェルらは、著書『アクティブラーニング—教室の興奮を創る』（Bonwell&Eison, 1991）の冒頭で、「驚くべきことに、教育者の『アクティブラーニング』という言葉の利用は、共通の定義というよりも、直観的理解にもとづいたものである」と述べている。また、多くの文献で用いられているアクティブラーニングという言葉にいくつかの共通した要因を指摘している。 ・学生は聞いているだけの状況よりも授業に関与している。 ・教師から学生への情報の伝達よりも、学生の能力開発を重視する ・学生は高次の思考活動（分析、統合、評価）に従事している。 ・学生は何らかの活動をしている（読書・議論・作文など）。 ・学生自身の態度や価値観に基づく探索活動の重要性が強調される。 彼らはアクティブラーニングをこれらの特徴から「読解・作文・討論・問題解決などの活動において分析・統合・評価のような高次思考課題を行う学習」と操作的に定義している。」とある。今回はそこに重点を置きながら、指導のあり方と授業の改善について考察していきます。

## 2 歴史学の観点から考える日本史の指導のあり方

入試問題で断片的な知識を問うような出題を見ることがあります。一方で社会を見渡すと「教養としての体系的な知識」、「広い視野と総合的な分析力」が求められています。歴史学という学問は様々な存在する膨大な情報（史料）の中から必要なものを拾い上げ、それらを総合することで、その時代や社会や生活のありようを復元するのが特徴です。しかしながら「歴史＝暗記科目」という認識は自身の学生時代はもとより、親の世代もそのようであったと聞く。この影響からか教職に就いてから「歴史が嫌い」という生徒が少なからず存在したり、「試験時に人物や出来事の暗記を一生懸命やったが、試験ではまったく活かされなかった。それは試験が難しいからだ」という意見に晒されることがあります。ここで「晒される」と書かせていただいたのは、意見を頂戴することもあるが、疑念を持ったまま意見をぶつけられることがあるからです。つまり「歴史＝暗記科目」であり、そういう授業や試験にしないのはどういうことだ。」というものです。疑念に対しては十分な説明をしても理解してもらえないまで半年かかったケースがありましたが、模試を解いて「定期試験とほぼ同じ形式で模試が出題されている。授業と試験の意図や狙いはここにあったのか。」と気づいてから、そのような機会はほぼなくなった。

かつて、大学入学直後の学部ガイダンスや卒業論文の題目を考えると「新選組と坂本龍馬、真田幸村は史料が少ないことで新しい発見が見つかりにくいことと評価がしづらい存在なので題材にはしないこと。」と説明があった。事実、論文とは明らかになっていないことに光を当てるもので、明らかになっていることを調べてまとめるのはレポートです。「知っている」ことは大切であるが、それより大切なことは「そこから何を考えることができるか」です。日本史における諸問題の解釈が「確定した1つ」ではない以上、教員が教え、それをむりやり「知っている」状態で定着させる、すなわち暗記させることは危険ですらあります。そこで、国立大学の日本史の入試問題における出題の型を調べる中で行きついてきたものでありますが、6年前から歴史的事象を「対比」、「関連」、「総合」させる3つの問の作り方を採用し、よりよい問の作成に向けて日々研鑽を積むところです。

### 3 「問題設定型学習」

授業は「問題設定型学習」を採用している。「問題設定型学習」は「教員によって設定された問題を解決することによって学習する技法で、一般的に問題は授業に必要な知識や技能がないと解けないレベルのものが設定されており、学習者が知識や技能を獲得し、それを問題解決に応用するプロセスを教員が支援するという形で授業が進む」ものだ。『アクティブラーニングのデザイン 東京大学の新しい教養教育』（永田敬、林一雅 2016）では次のように解説されている。「教科書のように構造化された知識を習得する際に、単なる知識の記憶にとどまらず、応用可能な形で定着できることにメリットがある。すでに展開されている授業をアクティブラーニングにする際は有力な選択肢になる。その一方で問題設定型学習は従来講義型授業より時間がかかるのも事実である。カリキュラムの中で特に核になる知識や技能を選び出し、メリハリをつけて導入することが必要になってくるだろう」と。これに単元の指導案をあわせることで、狙いがよりはっきりしたものとなり、知識理解をメインとする時間があれば、それを活用して問題を解決する作業を行う時間などメリハリが今まで以上についてきたのが生徒の学習活動から見てとることができる機会が増えました。

一方で発表の時間はこれまでの学習で得たことを活かす場所であるので、いかにアウトプットさせるかを考える必要がありました。知識・理解のインプットを誤ると、必然的にアウトプットも誤ることから、「どう問うのか、何を問うのか、どう考えさせるか」と考えながら戦略的に単元の指導案をつくることができことは大きかったと言えます。

### 4 「主体的、対話的で深い学び」には問いの精度を上げる

かつて、「北海道高等学校学力向上推進事業」の教材作成に携わらせていただいたときに「この問題の出題方法と解答を見る限り、きっと解答のように答えさせようという意図があって問題を作成したことは理解できます。但し、この問い方だと内容不十分の解答しか返ってこないと思われるので、もっと解答で聞きたいことを具体化して焦点を絞った問いにすると、解答もしやすくなると思います。」と助言をいただきました。そこから、問いは大きく「対比」、「関連」、「総合」の3種類に分けて、どのようなアプローチをするべきかを具体的に指示するようにしています。

「対比」は事象どうしの違いに視点を当てる問いで、2つの事象を対比させる場合、ニュアンスの違いはあるものの特徴（特色、特質、性格、立場など）を問う場合と、過程は「変化、変遷、推移」、「発展、成長」、「転換」、「展開、経緯」などのバリエーションから2つ以上の時期を取り上げてそれぞれを対比的に把握させて表現させる。「関連」は事象どうしの因果関係を問うことで、「原因と背景」を問うもの、「結果と影響」を問うものがある。「総合」は1つの事象や時代をいくつかの観点から総合的に、または多面的に説明させるものがあります。

以上を踏まえると、教科書をじっくり読み込ませていくことが基本となり、用語を覚えることが必要です。しかしそれ以上に、時代の特徴や、出来事の時代背景を把握させるなどに注意を払わせることや、時代の前後関係において「何が変わったのか」、「変わったことで世の中にどのような影響があったのか」を関連や対比が説明できるようにさせることを日頃から訓練していく必要があります。前期のレジュメにも『知識の量ではなく「目的は、発生場所、構成する階層・身分は、結果、その後の影響」と考えさせる機会を多く持つ必要があると考えます。』と記載しましたが、これらを踏まえて問いの精度を上げることが「主体的、対話的で深い学び」に繋がっていくと思えます。また、「目的は、発生場所、構成する階層・身分は、結果、その後の影響」と考えさせる機会を多く持つことで、教員に頼らずとも、自力で課題を解決する方法を考える力を養わせることにつながると考えます。授業時に扱ったもの、これから扱うものとして、「鎌倉時代の統治機構について問うたもの」、「室町時代の応仁文明の乱の影響について問うたもの」、「元が日本への侵攻に失敗した理由を問うたもの」がある。それぞれ模範解答もあるので参考資料とします。

「対比」

**Q1 鎌倉幕府と東国の財政と統治について、関東知行国の観点から、公武二元支配の観点からそれぞれ説明しなさい**

財政：幕府の財政基盤の1つは関東御領と、将軍の知行国である関東知行国である。これらの国では有力御家人が国司となり、公領からの収入を収取した。

統治：東国御家人は朝廷の官職には頼朝の推薦がないと就くことが出来ず、幕府は東国に独自の法を出していたことから、朝廷が東国に命令を出す場合でも幕府を経て伝達された。東国の荘園・公領の領主からの訴えや御家人の訴訟は幕府が裁いた。しかし、畿内・西国では幕府の権限は小さく、朝廷が強い支配権を持っていた。

「関連」

**Q2 承久の乱による影響を3つ答えなさい。(朝廷・土地支配・西国の3観点)**

- 1、鎌倉幕府は後鳥羽、順徳、土御門の三人の上皇の配流、仲恭天皇の廃位を決めて、朝廷に対する優位性を高めた。
- 2、戦功のあった御家人を上皇側から没収した所領の地頭に任命し、幕府勢力を全国に拡大した。また、新補率法を定めて地頭の給与を保証し、この率法の適用を受けた新補地頭と従来の本補地頭とを区別した。
- 3、京都に六波羅探題を設置して朝廷の監視や西国御家人の統括にあたらせ、西国への支配力を強めた。

「関連」

**Q3** 御成敗式目により朝廷の法の位置付けは怎么样了か答えなさい。

幕府の勢力範囲内に適用が限定されていたので、朝廷の法は否定されていない。朝廷の支配下では律令の系統をひく公家法、荘園領主の支配下では本所法が有効性を持っていた。

「総合」、「関連」

**Q1** 応仁・文明の乱における影響はどのようなことか、「室町幕府の支配体制」、「守護大名の領国経営」、「中央の文化と地方」の3つの観点から説明しなさい

- ・室町幕府の権威が及ぶ範囲が縮小し、室町幕府の支配体制が崩壊した
- ・幕府権威に依存した守護大名の多くが没落し、かわって守護代や国人が領国の実権を握り下克上の風潮が強まった。
- ・戦火を逃れ、地方に下った公家や僧侶により中央文化が地方に伝えられた

「総合」

Q1 元軍が日本への侵攻に失敗した要因を以下の年表を参考にして、元と他のアジア諸国との関係を踏まえながら200字程度で説明しなさい

年	歴史的事項
1180年	平清盛が大輪田泊を修築する
1206年	チンギス＝ハンが即位する
1231年	モンゴルが高麗に侵攻する
1259年	高麗がモンゴルに降伏する
1260年	フビライ＝ハンが即位する
1270年（～1273）	高麗で三別抄が反乱を起こす
1271年	元王朝の成立。元使が日本へ来航する。
1274年	文永の役
1278年	元が日本商船の交易を許可する
1279年	南宋の滅亡
1281年	弘安の役
1284年	元の大越（ベトナム）侵攻
1286年	元は3回目の日本遠征を中止する

（ 解答例 ）

1270年に高麗王室の部隊であった三別抄が濟州島や江華島などで抵抗したことにより、日本への侵攻が遅れたことや、元が造船技術を持たないことから高麗の人々に造船を行わせるも、協力的ではなかったことがある。

一方で、元軍は様々な国の混成軍であり、そこに高麗、旧南宋の勢力を加えても日本侵攻に対しての意気や結束力は向上しておらず、かえって高麗、旧南宋や大越（ベトナム）などの人々から抵抗運動が起きたので。（198字）

## 5 まとめ…「教科書で教える」

平成30年10月13日（土）の日本経済新聞に東京大学史料編纂所教授の本郷和人氏の「日本史ひと模様」という連載に興味深い記載があったので抜粋であるが紹介したい。『学生時代、山川出版社の日本史教科書を作成していた恩師の石井進に質問した。先生が執筆している教科書は、他より詳細で厚くなっています。どうしてですか？先生はいつものように、なんでこいつはこんなことも分らんのだ、という表情で答えて下さった。「教科書は学びの道具なんだから、データは詳しい方が良くないか。あとは現場で高校の先生方がうまく使ってくれればいいんだよ。もちろん、これを全部頭に入れる必要なんてないさ」石井先生の考えは十分に納得できる。ところが高校の先生方と話して「教科書は原則、全部覚えろ、と教育している」言われビックリしたことがある』と。

「教科書を教える」ことと「教科書で教える」とでは大きく意味合いが違ってくるが、教科書を全て覚えさせることよりも、前期の反省から教員側は問いの精度を上げ、教える度合を減らし、生徒たちが問いに対して調べて、頭をアクティブにさせ、他者に分かり易く説明させることができるよう仕向けることが主になってきました。ここに満足せず、多くの意見を頂戴しながら今後の研究に活用してまいります。よろしくご指導下さい。

### 参考文献

- (1)『アクティブラーニングのデザイン 東京大学の新しい教養教育』 永田敬、林一雅 東京大学出版会 2016
- (2)『大人になるためのリベラルアーツ；思考演習 12 題』 石井洋次郎 藤垣裕子 東京大学出版会 2016